

# 知識探訪

多民族社会の横顔を読む  
協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

## 「ほんまもん」の日本食とイスラム食文化

藤川武海（追手門学院大学准教授）

「ほんまもん」の日本食に精通する外国人は決して多くない。これは提供者側に非があるからと言えよう。経営者や調理人が現地人である海外の日本食レストランの中には、ほんまもんの日本食とはかけ離れた食事を客に提供する店が多い。これは単に経営者や調理人の伝統的な日本の食文化に対する理解の欠如が理由の場合がある。

しかし、たとえ伝統的な日本の食文化に精通しているとして、必ずしも「ほんまもん」の日本食を提供しないレストランは少なくないのが実情だ。日本食レストランの顧客の多くが現地人である店もあり、そのような店ではある程度現地人の舌にあうようにアレンジするのが顧客のリピー率向上に不可欠となる。

前置きがやや長くなったが、ムスリムの場合を考えてみよう。ムスリムは「ハラール（ハラル）食」と呼ばれるイスラム教の戒律で許可された食べ物しか口にすることができない。豚肉は禁忌であり、含有量の多少を問わずアルコールを含む料理は厳禁である。

筆者は約4年半イスラム教を国教とするマレーシアにて居を構えた。マレーシアには多くの日本食レストランがあり、それらは二つのタイプに分かれる。一つは「非ハラール」の、二つ目は「ハラール」の日本食レストランである。前者は日本より空輸によって取り寄せた食材や、本みりん等の調味料を使った料理を提供する高級レストランを含む。何度か訪ねたがそこでムスリムの顧客を見かけることはなかった。当然である。ムスリムが非ハラールのレストランで食事をとることは許されていないからだ。

非ハラールとハラールの日本食レストランの違いは何であろうか。一言でいえば前者は非ハラールの食材や調味料の使用が許され、後者ではそれらの使用は厳禁である。マレーシアにあるハラールの日本食レストランの多くが回転寿司チェーン店で、伝統的な日本食を堪能することは非常に困難だ。

なぜだろう。伝統和食は素材の味を生かした薄味が基本である。それに対してマレーシアでは香辛料や調味料を多く用いた料理が多い。果たして理由はこれだけだろうか。否、伝統和食において頻繁に使われる調味料にも一因があるのだ。砂糖や塩はムスリムによっても日常的に消費されるものの、アルコールを含むみりんや酒の使用は固く禁じられている。寿司を作るのに無くてはならない酢にもアルコールや酒粕が含まれているのである。日本食は薄味を基本とするものの、みりんや酒などの調味料を一切使わずに作ることは容易ではない。

2012年8月、京都新聞で「京料理でイスラム食」を題とする記事が掲載された。記事は京都外国語大学の池崎宏昭教授をプロジェクトリーダーとし筆者が共同研究者を務める「京料理のハラール弁当創生事業」プロジェクトの活動取材した記事である。同プロジェクトの下、同大学の学生が国立マレーシア科学大学を訪問し、マレーシア人の日本食に対する意見や認識の調査を行った。

マレーシア科学大の学生を招き、全員が日本人である京都外国語大学生と、全員がムスリムであるマレーシア科学大の学生が共同でメニューを作成しハラール食の弁当作りを行った。弁当は卵焼きなど伝統和食の基本を押さえた代表的なおかずを織り込んで作成された。

特筆すべきことは、マレーシア科学大の学生によって使用された食材と調味料は京都市内にあるスーパーマーケットで購入されたものである。調理過程の味付けにおいて、みりんや酒を含んだ調味料が使えない等の理由で試行錯誤があったが、学生がアイデアを出し合って（例えば、みりんの代わりに蜂蜜を使う等）作った料理はどれも好評だった。

マレーシアから来日した学生のほとんど全員にとって初めての来日となった。つまり、日本で日本食を口にすることがなかったのだ。筆者は学生に、来日前と比べて日本食に対する意識が変わったかどうかを尋ねたところ、多くが「変わった」と答えた。味付けや盛り付けが在マレーシアの日本食レストランで提供される料理と日本（京都）でじっさいに味わった料理でかなり異なるとのことだ。

ムスリムにとって「ほんまもん」の日本食を味わうには、少なくとも現時点では、来日しそれなりのレストランに行く気構えと財布が必要となるようだ。

### < 筆者紹介 >

1975年、京都府木津川市出身。豪州西シドニー大学 (University of Western Sydney) 経済学博士 (Ph.D.)。同大学講師、マレーシアトンクアブダラーマン大学ビジネス・ファイナンス学部初代学部長、国立マレーシア科学大学経営大学院上級講師、追手門学院大学経済学部講師を経て現職。専門は行動経済学。マレーシア現地企業のコンサルタントを経験し、現在、国際経済心理研究学会マレーシア国代表、国際マラヤ・ウエールズ大学客員准教授。